

痩せ

井口昭久

オリンピッククに出場していた羽生選手がソチから帰国。空港でインタビュに答えているのをテレビで見た。スケートリンクでは頑健そうだが、スーツ姿でいると、きゃしゃに見える。身長が170^{センチ}で体重が56^{キログラム}だそう。空港の民衆に混じってしまえば金メダリストだとは分からないに違いない。

私は若い頃から痩せていた。身長178^{センチ}で体重が55^{キログラム}しかなかった。こんな痩せでは、一生結婚ができないのではないかと、思い悩んだ時期もあった。

高校生の時、母親が心配して医者にご相談に行った。私に隠れて医者にご相談した母親は、

ない。バンドの穴が遠くてズボンがずり落ちそうであった。腹は絞った雑巾の真ん中のようにであった。だから夏でも腹巻きをしていた。ひよろりと伸びた腕、骨が歩いているような足。肋骨の浮き出た胸。人前で裸にならなければならぬ身体検査を受けるのは死ぬほどに悔しかった。

私の思春期は病的なほどに自意識過剰であったようだ。

多くの人は中年になると腹がでてくるものだが、私の腹はずっと絞った雑巾であった。今でも痩せている。

2014年3月5日…病院詰所

私が患者を診に行く病院のナースの詰所に認知症の患者が2人いた。

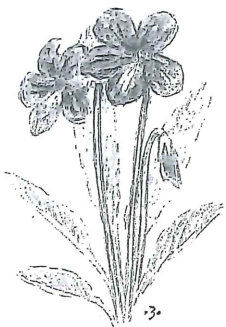
看護師たちは忙しい。手間のかかる患者は車椅子に乗せて病室から連れ出す。そして詰所内の目が届く場所で介護をするのである。

認知症になると痩せている人が多い。私を含めて痩せた老人3人が机の周りに座っている

「よく食べること」だと医者に言われて帰ってきた。私の「痩せ」が医者によって認定されたことは、私の肉体にたいする劣等感に追い打ちをかけた。肉体への陰性思考に加え、食事の強制によってさらに食欲を失くした。私は背が低くて腹が出ている人がうらやましかった。

信州の冬は寒い。腹巻きをしてメリヤスの下着を着てセーターを着る。その上に学生服を着て、オーバーを被れば元の肉体がどれほどのものか分からなかった。だから私は冬が好きだった。

夏になれば半袖のシャツを着なければなら



た。「林さん」と、看護師がそのうちの1人に話しかけた。「お昼食べようか?」「食べると言われれば、食べるし、食べるなどいわれれば食べんし、どっちでもいいわ。あんたらの言うとおりにするわ」「じゃ食べようか」「中田さん。インスリン打った?」「話が合わん」「合わんじゃなくて聞こえないんですよ。これから打つね」

「床屋へ行ったのね。頭カッコイイワ」中田さんの隣に座って話しながら診察していたつもりであった私にナースは言った。「ウン、行った」と私は答えた。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)